① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第12巻　第5号　1967年5月25日　大町山岳博物館

大糸線を想う

大糸線が信濃大駅よりやなば駅に開通したのは昭和四年九月であった。

当時の大糸線は現在からみると、いたって幼稚なものであった。マッチ箱の様な客車、これに各座席毎にドアーがつき、乗客もいたって少く、小中学生の外ほとんどが顔み知りの人であった。

列車は二～三両編成で黒い煙をはき、坂を獣のようにあえぎ〳〵のぼり、下り坂ともなれば、さながら脱兎の如くつっぱしる。

自転車通の悪童連の競争相手とされ、あなどられることしば〳〵、これが『ヨーイト線』の異名をとった根元もこゝにあった。

この愛称のもとに大糸線はさらに北部へと延長され地元民に親しまれ初期の成長をして行った。

しかしこの間にも積雪に又雨期ともなれば土砂くづれに石炭の不足に幾多の障害に遭遇、今日にいたって居りますが、あの炭の香、なつかしい気笛、そして動輪を動かすクランクの音、暮れてゆく湖面に、はてしなくつたわってゆく。

列車の走音をきくと、幼き日の追憶がよみがえり、そして消えてゆく…

特に冬の夜ながにあの走音をきくと、ことさらである。

空腹に駅につく時間のまちどうしさ車中の騒音、いつしかねむ気をさそう、車外は白魔の吹雪があれ、もう〳〵たるスチームの熱気車輪の転轍器をわたる音に、はっと我にかえり下車駅のきたことを知る。

なつかしい追憶はつきない。大糸線を朝夕通勤に利用して約20年余今さらながらの進歩に驚く、と共に車窓よりみられる沿線の変り方特にたちならぶ住宅、屋根のテレビアンテナ大糸線の発展と市の発展とが、さながらマッチして行く、

願わくは一日も早く全線が電化され沿線の人々に福音をもたらし、遠方より訪れる人々に便ならんこと切に希望する。【成沢祥人】

上高地のイワナ

坂田尚

上高地附近のイワナも釣り人の増加と河川の氾濫で近年その数が減少した。

一日に一貫目以上もイワナの釣れた時代は遠く過去のものとなってしまった。現在上高地の釣り人で名人と云われる人達でも、一日中梓川で竿を振り込んで、やっと四、五百目と云うところでビクを満たすまでには困難なようだ。

こゝ四、五年前までは梓川の流れにも数多くの魚影を見たものであるが、最近はその遊泳する姿をほとんど見ないまでに減少しつゝある。

それでも明神池附近の支流には、まだかなりの数がいるようだ、もっともこの附近はかって長野県水産課事業として、度々稚魚の放流をしたものが現在残っているし、その支流は河川の氾濫もなく、一般の釣り人が入漁しないためでもある。

上高地のイワナの保護施設としては明神池上流の養魚場がそれで、宮川の清流を利用しここで長野県水産課が大正十四年夏から昭和八年頃まで内水面漁業の振興のために、第五期にわたって稚魚の放流をこゝろみた。

第一期は地元梓川のイワナを集卵し孵化したものを各河川へ放流した。

第二期としては福島県猪苗代湖のカワマスを卵で購入し十二月ごろ場内の孵化槽で孵化した稚魚を、イケスへ一時放ち二五〇ミリ～三〇〇ミリ位の体長にしてから、主として宮川へ放流しその一部を各河川へ試験放流した。

これが現在梓川本流で明神橋附近からその下流河童橋附近までの広範囲に見られるイワナに最も近い形で残っているものゝ一部である。

第三期は昭和三年中禅寺湖のニッコウヤマメで、これも卵で購入し第二期同様に孵化した稚魚を宮川へ放流した

第四期は昭和四年北海道産のヒメマスを卵で同じような過程で放流した。

第五期はアメリカ産のブラウンマスの卵を空輸し、これも前記同様の過程で放流している。

孵化事業も昭和八年までゞ一応終了し、あとはこれらの放流した魚の自然繁殖をまつことにした。

以上の孵化事業の成果は四十年後の今日、明神池を中心として数次回の自然交配の結果イワナに近いがカワマスともヤマメともつかない種類の魚を生みだしてしまった。

例えば上高地附近で登山者一般にイワナで名の通っている魚が四種類あるが、その魚紋や体色もその魚によってまちまちである。

先づ比較的純粋な形で残っているイワナとブラウンマスは少数であり、そのほとんどがイワナとカワマスの交配されたもの、またヤマメとカワマスの交配されたものなどで、これらのものは何回となく自然交配するうち一つの型を造ってしまった。魚型もそれぞれに違い大型のブラウンマスの成長は四十センチを限度とし、イワナとカワマスの交配は成長しても三十センチがせいぜいである。またヤマメとカワマスの交配されたものは小型で二十センチ位で体長がとまる。

これらの魚の習性は同一であり、イワナとほとんど変らないがたゞイワナより貪食であるので釣りやすい。

産卵期のイワナはオス・メス共に背面が薄茶褐色に、また前ビレの縁が白く変色する。

普通イワナの産卵期は十月上旬から下旬までであり、梓川の浅瀬や支流の浅瀬で小石のある砂場をえらび、尾ビレで直径三十センチから四十センチ位、深さ三センチ位の穴を掘る、これはメスのイワナの大きさによって穴の広さも変ってくる、そこへ産卵するが交配時は一匹のメスに三匹から四匹のオスがつきオス同志でメスの争奪戦をする。

卵粒はイワナの場合三ミリから四ミリ位の黄色の透明で、一腹で五百粒から八百粒の卵を産みつけると云う。

またメスは産卵後も現場を余り動かずにいるがオスは交配が済むとほとんど下流の深みへ移動してしまう。

イワナは稚魚から産卵できる成魚になるまでには五年以上の成長期が必要とされている。またカワマス、ブラウンマスの産卵期は、イワナより時期が遅く十二月上旬から一月中旬ごろまでの間で、明神池上流の各所で産卵する。この頃、地上では一米もの積雪期で毎日吹雪の明け暮れであるが、水中では数十匹の魚の群が産卵と交配に専念するさまは見事である。

普通はイワナのように産卵するための穴は掘らないようだ。

卵粒はイワナよりやゝ小粒で二・五ミリから三ミリ位で透明の黄色が鮮やかである。

産卵期の変色はイワナ同様で背面だけ薄茶褐色となる、たゞ違うのはメスの腹部にある斑点がふだんより一層赤く鮮明になることである。

交配時はメス一匹に四、五匹のオスがつきメスをめぐっての争いはイワナ同様である。

卵粒は多量で千粒から千五百粒もの卵を三週間以上の期日をかけて産みつける。

産卵された卵はイワナの場合は四十日位発眠し、そのあと五日位で孵化するが、カワマス、ブラウンマスの場合は発眠が四十五日位で、そのあと七日位のうちに孵化する。

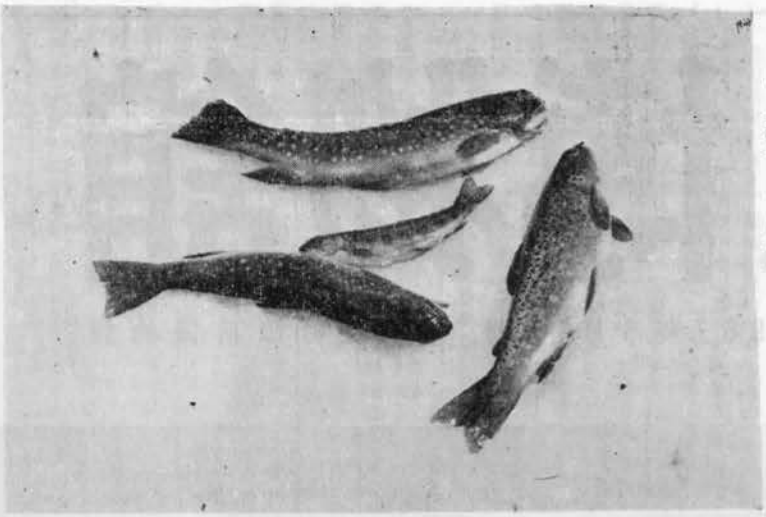
稚魚の体長は七ミリから八ミリの淡黒色で、はじめ寒天状の卵のうをつけて遊泳するが三、四日でその卵のうが取れて稚魚らしい姿になる。

人工孵化の場合稚魚の餌づけは普通、玉子の黄身とレバーを煮て、ねり上げたものを水に落して、十日間位与えるがそのあとはメリケン粉にサナギ、魚粉などをねり餌にして、これを体長三センチ位の放流期まで与える。

明神池畔に越冬したのを機会に三年前から人工孵化を自分なりのやり方でこゝろみたが一年目は発眠までに至らず失敗した。

二年目は交配した卵の保存に重点をおき簡単な孵化槽を作って水流を自然に近い状態にしたところ、見事発眠し数百匹の稚魚が孵化した。

今年の一月上旬カワマスとブラウンマスの交配をこゝろみたが、発眠をまたず冬の明神池から一月下旬に下山したまゝなので、その成果を見ずに終ったのは誠に残念である。



上よりヒメマス、ヤマメ、カワマスもブラウンマス

田の神様

長沢欽平

田の神様は地方地方で、祭神が異っている大町周辺では神棚は正殿で南向き、次の田の神様は一段低く、俗に恵比寿様の棚というのが田の神様の棚である。

これは、日本は北半球に位置しているので第一の神棚は南向き、次位の棚は、やはり太陽基準の日の出の東に向くのが普通である。町の家並でその通りに参らぬのは云う迄もない。

苗代潰し、つまり本田移植を大田植といい、田の神に報告するため、苗の束に飯を入れ包（つと）とし、その包を三つ一束としたものを二つ、恵比寿様の棚に上げる。

恵比寿様は蛭子（えびす）夷（えびす）とも書き七福神の内に数えられる。

恵比寿様は摂州一の宮、西宮大神ともいい時の天皇が漁（すなどり）に幸（みゆき）されたところ、岩の上に白い神様が現われたので恐れをなし祀られた。いわば幻覚で天子様は今の神経衰弱であった。昔は一般に迷信が強く、白い鳥が現われれば年号を白鳥（はくち）、或は白鳳（はくおお）赤い鳥がでれば、朱雀（すじゃく）等と改元された位で、災害のないよう祈った。そこで大町地方の恵比寿様は一応大国主系の事代主命（ことしろぬし）の神と考えられます。

安曇の地は海神族安曇部の勢力を振ったところ、安曇部は北九州に居て朝鮮より農業を伝え、伊勢の渥美、岐阜の阿曇を経て終りに信濃安曇に土着したもので、各地に地名を残している。この地より奈良朝へ奉った麻布に郡司安曇部百島と書いてある布が、正倉院に御物として、大切に保存されているのは皆様のご承知のとうりである。

この時分の稲の種類は日向、古志（こし）等三種類ほどあり、だん〳〵交配され改良を加えたのが、只今の農林第十三号と命名された訳で、遡れば結局は日向や古志に落つくことになる。

刈掛の御神事

秋八月二十四日初穂を田の神に奉る御神事を刈掛といい、ススキに赤い紙をつけ、穂高大明神と書き用水端に立て、家ではその夕は麺類を神に奉げ、全員ススキの箸で麺類をいただく、麺類は細長く持続の意味もあるが昔は混食を奨励し、菜飯、大根飯などを食し白飯を禁ずる達しもある。水利が開けない畑が多かったことも原因していよう。

用水端は海ノ神だから水に縁のあるところを選び、大明神は正しくは大名神で、延喜年間穂高の神は名神大川会（かわあい）の社は名神小という社格、名神大は当時朝延より、弊帛を賜った。

この場合刈敷の神事の田の神は穂高即ち、綿積（わたずみ）系で海ノ神様、その夫人を氷鉋刀売（ひがなとめ）といい、長野市付近に氷鉋という部落もあり神に縁故のある部落の名前である。

奥羽地方では、筒子別（つつこわけ）という神事がある。近津に鎮座するので近津神社祭神は味すき高彦根命（あじすきたかひこね）といい開墾の神、御神事に因み筒子別神社ともいう。収穫の時、竹の筒二本へ籾を入れ神に奉り、一本は翌年の種にいただいて農家は持ちかえる風習が残っている。

大町の高根神社、二光の二荒山神社も同じ祭神で神紋は大国主系なので平戸梶（ひらとかじ）の葉とする。

信州は古く海ノ神、海積と諏訪の神の開拓による地域。郡名佐久は開拓の意。御射山（みさやま）の御神事も安曇の刈掛の神事と似ている。

田の神様は地方で異なることは先にも書いたが、本当は本朝衣食の神で、保食神（うけもちのかみ）、或は稲倉魂命（うがのみたまのみこと）といい、三越や白木屋、高島屋等デパートの屋上に祀ってある。

本社は伏見、俗に伏見稲荷と称え、伊勢外宮の祭神、内宮へ御饌御酒（みけみき）をあげる。

お稲荷様でも豊川稲荷は仏教に属し、だきにといい、訳して夜叉（やしゃ）、お姿は狐に乗り天女が空を飛ぶ姿である。

事変中神社にあらざる豊川稲荷が、鳥居のあるのはいけないと政府から撤廃を命ぜられたことがある。同じ稲荷でも混同し易い。

昔は原始神道といい、高い山大きい岩石、狐、山姥、飯綱（いいずな）信仰が盛んであって、豊川稲荷の狐といいずなの神とを混同して、豊受稲荷と称し田の神様になっている。飯綱社の祭神も稲倉魂命を充てている。

混同や誤りを一番犯す原因は、何んといっても神仏混こう或は神仏修合で、勢力のある大きな神社では皆仏様を入れた。この本尊は本地仏といい、堂を神宮寺という。王子神社にしても観音堂と卒塔婆三重塔があり仁科神明宮には維新まで神宮寺があった。

昔は王子観音とはいわず若王寺（にゃくおおじ）といい一種の神宮寺、今この付近で神宮寺のある社は中土の諏訪社だけである。

神仏混こうさせたのは仏教の布教の便法として、日本で尊崇する天照大神は仏教では大日如来であり、八幡様は仏教では阿弥陀様にあたり、いささかも異ならないと弘法様達が説教しました。これを本地垂迹（ほんちすいじゃく）という。

神様を権現様と称したのは権は、仮又は二番目という意味、仁科神明宮三官主に横沢権の頭（ごんのかみ）というのは、宮司の次位を表わす職名、権現の現はあらわれる。

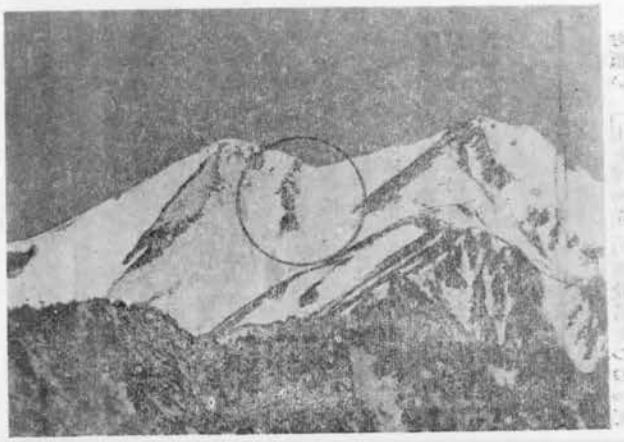
云いかえれば王子観音は十一面観音が、御霊代であるが仮に神様になって現われたのだという意味である。以上いろ〳〵雑然と書いたが要約すると次のようになる。

一、田の神様は各地方で異なる神事と行事が行なわれる。

二、祭神も事代主であったり、穂高見命、味すき高彦根の命であったり、健美奈方の神様であったりする。

三、仏教の影響を受け、純然たる日本神道ではない。

【若一王子神社総代役員】



爺ガ岳に種まき爺さんがでると、農耕をはじめた

信州植物寸景

横内　斎

（その四）

シナノスミレ　Viola Tanakaeana Makino　すみれ科　本県の植物研究家故田中貢一氏が、木曽上松町にて初採したもので、同氏はその著「信濃の花」に次のように記している、本年（明治三十五年）九月、我が信州駒ヶ岳に於て採集せるものにして、其花を得る由なかりしも、其葉の頗る細長なるは以て他種と区別するに足れり、其脚部深く心臓状をなし、縁辺鈍歯を有す、葉面細微の白毛を密布し、稍粗造なり、托葉微小半ば葉柄に附着す、無茎、果実小、（中略）牧野先生に訂して、其新種なることを認定せられ（後略）て長く花のあるものを採られなかった、私は、恩師小泉先生と共に大正十五年六月その花あるものを採った、田中氏が発見してから二十五年后である、花は美しい黄色で、所は駒ヶ岳二合目の松林中である、信濃特産である。

ハナヒョウタンボク　Lonicera Maackii Maximowicz　すいかずら科　灌木、これの見事なのが軽井沢沓掛の星野温泉入口近くにある。葉は膜質で卵状の長い楕円形か倒卵楕円形、梗は甚だ短かい、萼は早落性、花冠は白色で外側に少し毛がある。大陸との共通種で、本州中部以北の山地にまれに産する、朝鮮、満州、アムール、ウスリー、中国北部分に布する。

本県では、軽井沢沓掛と菅平に産することが明かになっている、菅平のものは近年伐採の災にあい、今四株程が現存している。

オニシオガマ　Pedicularis nipponica Makino　ごまのはぐさ科　幼時には全体に白色の長い軟毛がある、茎は高さ三〇～八〇cmに及ぶ大形なもので、シオガマ属中の王者である、葉は羽状全裂し裂片は八～一三対、裂片も細く深く裂ける、苞は萼よりやや長い、萼は長さ八～一二mm、花冠は淡紅紫色、山中の湿所に生える、日本特産の種で、本州の北部から北陸に分布する、日本海地域系の代表者の一である、

本県では、苗場山、下水内郡野々海の湿原、鳥甲山（ちょうこう）、栄村水内地区、北安小谷雨飾山荒菅沢に見出された、一種この白花品をシロバナオニシオガマ form alba Mizushima et Yokauchi といい、前記野々海と鳥甲山に産する、私の発見であり、産地も私の見出しである。基種は岩菅山麓梯子坂付近に昭和七年頃採ったが、今は絶滅してしまった。

ケショウヤナギ Chosenia bracteosa Nakai　やなぎ科　小枝はまったく毛はなく白粉を帯び、これが化粧したかにみえるので、それを見たてて和名がおきた。落葉をはじめるとその小枝が赤味を帯び、冬季にはそれが鮮やかになって、つもる白雪との対照がすばらしい、芽吹く頃になると、漸次うすれてやがて幼芽がほころびる、これはこの種の大きな特徴である。今は絶えてしまったが、梓川、奈良川合流点付近の南安曇の熊倉の河原に生育していたこの木を篠ノ井線の車窓に眺めて、この現状を一度たしかめたいと思っていた、今から七年前、勤めをやめた年の四月、現場を訪れてこのすばらしい景観に接した、東北大の木村有香博士にこの小枝と現況をお知らせした所、先生は上高地でこれを観察され、その特徴の一に加えられるとお返事を頂いた、葉は大体倒披針形、両端は鋭頭、全く毛がなくやや厚い、柄は短かく白粉を帯びる、雌穂は長さ一～二・五センチ、苞は三～五本の脈がある、雄穂は長さ花時には一～二センチ、果時には四～五センチと延びる、子房は毛はなく、花柱は二個、柱頭は二個で二裂している。上高地には多産し、中ノ瀬橋から横尾までひろがっている、あの犬牙状の穂高連峯と、黒緑色の針葉樹と梓の清流と、このケショウヤナギの軟かな息吹きとは、まこと上高地の生命のシンボルである、北海道の一部とここ上高地、東シベリア、オホーツク海沿岸地方、樺太、朝鮮に分布する。すなわち日本海をとりまく地方のみに広がる、日本列島が未だアジア大陸とつづいた頃分布したもので、環日本海要素の代表種の一である。

ベニマンサク（一名マルバマンサク）Disanthus cercidifolia Maximowicz　まんさく科　学者によっては、まんさく科といろいろな相違点があるので「まるばのき科」として特立させる方もある。

落葉灌木で高さは一～三mになる、葉は卵円形で長い柄がある、心臓状葉脚、全辺で五～一〇センチの大形、厚い膜質で上面は緑色下面は帯白色、紅葉がすばらしい、この紅葉時に葉脇に短かい柄をだして接着する二花を開く濃い赤色である、すべての野花は地に委しよとする時、この紅葉と紅花、まことに晩秋の最后を飾るがようである、花弁は五片糸状星形に開く、萌は年を越えて熟する、本県では木曽と下伊那風越山一帯と清内路村に産する、これは木曽から浸入したものであろう。木曽では黒川（木曽川の支流）の下流右岸の木曽山林高等学校の学有林がその北限と思っていたが、奥原広人氏の私信によると檜川村平沢（奈良井川上流地方）にも産するという、木曽谷つづき岐阜県恵那地方と、中国地方、四国地方の一部に隔離分布をしている。日本特産の珍稀種である、私は大正の末年、依頼されて上杉町産の本種を、英国キュウ植物園に送ったが、今も健在でいるであろうか。

【訂　正】

第12巻4号「高山帯の上の世界」に誤りがありましたので訂正してお詫びいたします。

2P1段 Rhododendrons etosum をRhododendron setosum に

2P1段 Juniperus s qumaata をJuniperus squamata に

2P2段 土着のものではなかろうかと主張を土着のものではなかろうと主張

2P3段 ヒゲワシ（…）は骨や腐肉を食べる。ワシ…をヒゲワシ（…）は骨や腐肉を食べる、ワシ…に

2P3段 オオカミ（Canisulpus）をオオカミ（Canis lupus）に

2P4段 団塊植物（Stellaria decumbens）を団塊植物（Stellaria dec•mbens）に

2P4段 岩の下空地を岩の下の空地…に

3P2段 が運ばれる。乾燥した、…をが運ばれる、乾燥した、…にそれぞれ訂正。

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円（送料共）大町山岳博物館宛お送り下さい。（切手は不可）

表紙説明

西沢より西俣奥壁（爺ガ岳）

撮影　長沢修介

山と博物館　第12巻第5号
発行所　長野県大町市TEL（大町）二二一
一九六七年五月二十五日発行
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部